（様式１）

視　察　報　告　書

令和７年６月２５日

鳥取市議会議長　星見　健蔵　様

鳥取市議会福祉保健委員会
委員長　勝田　鮮二

本委員会は、下記のとおり委員を派遣し、行政視察（調査）を実施したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

１　期　　間	令和７年５月１２日から令和７年５月１４日まで
２　派遣先及び視察（調査）内容	＜千葉県木更津市＞ ○らづファミ応援隊の取組について ・事業の概要・目的について ・具体的な活動内容について ・利用実績と課題、今後の展望について ・らづファミ応援隊として携わる人・関係機関について ＜千葉県野田市＞ ○健康・スポーツポイント事業について、検診事業について ・事業の目的及び概要について ・具体的な取組内容について ・利用実績・課題・今後の取組について ○のだしこども館 Supported by Kikkoman について ・設立の経緯・目的・運営形態について ・施設の概要について ・利用実績・課題について ＜千葉県松戸市＞ ○認知症を予防できるまち まつどプロジェクトについて ・事業の目的と概要について ・事業の実績及び概要について ・課題と今後について ○るるぶ特別編集「いきいき松戸市」について ・発行に至った経緯について ・活用事例について ＜東京都港区＞ ○子育てひろば「あい・ぽーと」の取組について ・設置目的・運営について

	・これまでの取組と成果について ・課題と今後の取組について
3　派遣委員の氏名	勝田　鮮二、加嶋　辰史、岡田　実、西尾　彰仁、 岩永　安子、魚﨑　勇、平野　真理子、岡田　信俊
4　委員会所見	別添のとおり
5　参加者所見	別紙のとおり

別紙

所見

千葉県 木更津市	○らづファミ応援隊の取組について ・行政サービスとして直接に家庭を支援していることに最大の魅力がある。具体的には委託事業にてアウトリーチ型であり、この仕組みを組み立てるまでには、企画、予算化、委託業者の選定において、木更津市が産前産後の現状と課題を自発的に検討し、多くの時間と労力を要したことが伺える。 ・利用に際し、費用への負担感や他人が家に入ることへの抵抗感といった課題はあるが、事業開始の令和４年から利用者数は増え続けていることから、ニーズの高さが伺え、今後さらに利用者は増える傾向である。また、委託先の「(株) パソナライフケア」の体制も充実している。 ・この事業は鳥取市において潜在的なニーズは多くあると思う。是非、鳥取市の現状、課題を踏まえ導入に向けて検討してほしい。また、実際に鳥取市において「(株) パソナライフケア」のようなノウハウをもった業者があるかどうかがカギとなることから、そうしたリサーチも含めて検討してほしい。 ・都会なので民間事業者の手上げがあると思った。また、利用料の減免・免除制度はなし。措置制度もなし。課題には感じておられた。 ・鳥取市では事業委託を行っている市社協とのすり合わせが必要。子育て生活が楽しい鳥取市にしたいと感じた。 ・庁内外の多くの関係機関と連携し、課題共有や意見交換を定期的に実施。木更津市の切れ目のない支援が、高齢化が進む世相においても、人口増加という結果に繋がっている可能性を感じた。鳥取市でも同様の事業展開を目指していただきたい。 ・支援内容としては単純なものであるが、やはり乳幼児の母親に優しく寄り添い、話を聞くことで困っている家庭を支援につなげることができ、なお、虐待の防止にもなっており、本事業の意義深さを感じることができた。 ・本当に必要な人に届くサービスにしていくための措置、制度の仕組みを検討していきたいとの今後の展望を聞かせて頂いた。本市も同じく必要な人を取り残さないことが大切だと思った。本市でもファミサポの活動があり、本市にない所を取り入れていきたいと思った。産後ケアについては、本市の取組が充実していることを確認できた。
千葉県 野田市	○健康・スポーツポイント事業、検診事業について ・もともと国保事業として行っていたが、全市民対象に広げたということである。「健康スポーツ宣言都市」であり、健康づくり事業が位置付けられていると思った。 ・「のだ健康・スポーツアプリ」を導入、紙の「はつらつポイント」事業として、個人の生活環境にあわせていずれか選択できるとし

	た。両方あるのがいいと思った。 ・このポイント付与による取組は良いと感じたが、対象者への周知または参加呼びかけには、課題があると感じた。 ・健康診断については、鳥取市でも同様の課題を抱えており、受診勧奨の効果を担当者同士で情報共有すべきかと感じた。 ・健康年齢にある「若者」に重点を置き、ゲーム感覚のポイント制の導入、若者健康診査、歯周疾患検診に予算を投じて独自に行っている。予防を充実することで、市民の健康を維持するとともに、結果的に医療費の抑制につながることから、健康保健の攻めの施策である。費用対効果については今後の推移も検証し続ける必要があるが、鳥取市も検討すべきである。 ・年間 14,783 千円と比較的少ない予算で効果を発揮していると考える。鳥取市でも施行を検討してゆく必要を感じた。 ・まだまだ低水準であると感じるが数字的な実績は上がっている。ポイント付与や記念品申請などのアイデアは素晴らしい。興味を引き良い取り組みと考えるところだが、記念品などに工夫を凝らせば、数字的にもアップすると考えられる。鳥取市での採用の検討も望みたい。 〇のだしこども館 Supported by Kikkoman について ・野田市はお醤油の産地として有名なところで、市民の大半の方がお醤油に関連するお仕事をされている。こども館についても協力しておられ大変充実した施設だった。 ・私達が見学にいった時間帯は平日の昼過ぎであったため、親子で利用される方がいたが、利用者数の比較的少ない時間帯であった。下校時間になれば、まず小学生、続いて中学生、最後に高校生が集まってくるとのこと。また小学生から高校生まで一緒に遊ぶことが多いという。昔私達は年の離れたお兄さんやお姉さんと遊んでいた記憶がある。そうした場所がここにはあり、まさに地域のさまざまな年齢の子供たちが遊びの中で自主性、社会性、創造性を身につけ成長する環境であった。 ・驚いたことは、中高生も利用したくなる施設で、活用事例では、調理室を活用し女子高生がバレンタインチョコ作りの企画したこと、管楽器や軽音楽（バンド）などを演奏できるスタジオでは、吹奏楽部や軽音楽（バンド）を趣味とする中高生がここで練習をするとのこと。体育施設ではバスケットボールのシュートをひたすら練習する中高生もいるという。 ・屋内にはエアマットやボールプールなどが整備され、ボルダリングウォールなどのあるプレイルーム、音楽スタジオ、調理コーナー、パソコンコーナーなど、中学生や高校生も多く来ていた。 ・利用対象が０歳から１８歳未満の児童生徒となっていて、昼間は乳幼児から小学生、夕方からは中・高生とうまく利用されていた。下校後の友達同士の活動や遊び場としてこのような施設は必要だと感じた。 ・災害時の避難施設には指定されていないとのことであったが、有事の時は、物理的に人が集える施設となっていて、さらにマンホールトイレ用のマンホールが整備してあった。 ・特徴的と感じたのは、この施設の整備、利用に関して①誰でも

	公平に利用できる、②使う上で柔軟性をもつ、③使い方が簡単、④必要な情報が簡単に入手できる、⑤単純なミスが危険につながる、⑥少ない力で使用できる、⑦利用しやすい空間・サイズの確保。この７点は今後の公共施設の利活用には欠かせない要素であり、鳥取市においても取り組む項目であると感じた。 ・鳥取市において、雨が降ったとき、遊ぶ場がないと言われる。子供だけでも、親子連れでも安心して遊べる場だと思い、こんな施設が欲しいと思った。 ・特に印象に残ったのが、インクルーシブの理念を取り入れた施設の運営だった。屋外にはインクルーシブ複合遊具やバスケット型のブランコがあり、障害があってもなくても小さな子どもでも安全に遊べるので、本市でもこれから整備される公園に設置すべきだと強く思った。 ・対象年齢が０歳～１８歳の児童生徒であり、９時～２０時の開館となっており、子育て世代にはうれしいシステム。バリアフリーやユニバーサルデザインに配慮した、インクルーシブな施設となっており、本市も採用するべきと感じた。 ・インクルーシブの理念や、中高生が多く利用することなど 「さまざまな子どもたちが集い、子供の成長に必要な遊び場」 として多くの志向が凝らされており、見習うべき点が多方面に見えた。 ・この新しいニーズを加えた施設は、野田市の全域をカバーする中核拠点施設にふさわしい施設と思う。ところが、もしこうした施設を鳥取市に設置したいとなると、地形的に１箇所だけの設置では全市域のカバーは難しく、建設費、維持管理費が財政的に不利である。鳥取市は面積７６５ｋ㎡、人口１７万８千人に対し、野田市は面積１０３ｋ㎡、約１５万３千人であり、面積規模では鳥取市は野田市の約７倍ある。したがって鳥取市におけるこども館の設置は、鳥取の条件にマッチした政策の検討が必要である。 ・人口密度と財政規模を考えると、本市の場合は児童館新設よりも保守、修繕を必要とする施設を抱えていることを肝に銘じておきたい。
千葉県 松戸市	○認知症を予防できるまち まつどプロジェクトについて ・認知症（軽い、初期症状の人）の人が、セルフケア目標を設定し、達成の支援をするしくみ。「認知症本人の参加の仕組み」の在り方だと思った。軽度の方、初期症状の方に自分で治す方法として、提案していけたらいいと思った。 ・初回アセスメントから診療、セルフケア・セルフマネジメントにつなげるシステムの構築が非常に良い取り組みと感じる。ともすれば、軽度認知症持ち、地域に居住する場合にさまざまなフォローを考えられているのも良い取り組みと感じる。ただ、認知症予防プロジェクトとあるが、発症してからの対処法であり、本当の意味での認知症予防ができないものかと感じた。 ・軽度認知症の疑いを早期に発見し、医療機関につなぐことが一番大切であり、認知機能低下の原因を把握することにつながる。ただし、実施期間が地域包括支援センターのみである。また、書

	類が多いことや、初回アセスメントに時間がかかるため簡易的なスキームの検討が必要であると感じた。本市においても、先ずは早期の発見に努めること、実施期間を増やすことや簡易的なスキームの構築を目指していただきたい。 ・認知症を予防できるまつどと言われるゆえんがこのプロジェクトにあるのだと理解した。2025 年には、５人に１人は認知症になると言われていることを思えば、物忘れが増えてきた気がして、自分は認知症かもしれないと思う人は今後ますます増えていくと考える。市民の身近なところで、医療機関につなげる仕組みづくりと相談窓口の周知や行きやすさをより速やかに推進して言うことを学ぶ良い視察となった。 ・この事業の今後の改良点など注視して鳥取市においても早期に軽度認知症以上の方の発見と治療につなげれば良いと感じた。今後、鳥取市でも少子高齢化が進むと考え、早期に一人一人が人として人間らしく生きていく体制を創出また構築する必要があると感じた。 〇るるぶ特別編集「いきいき松戸市」について ・観光ガイドと見間違う様な出来栄えとなっている。高齢者出歩き及び、社会参加を誘導するガイドとなっていて参考となった。 ・松戸市にある千葉大学予防医学センターと松戸市が手をつなぎ介護予防の研究を行っており、その中で、社会参加することによるフレイル予防のデータがあり、「るるぶ」と連携し、「集う、始める、癒す、歩く、食べる」の５区分に市内の魅力発信を行っており、とても良い取り組みであると感じた。鳥取市でも地元旅行会社、旅行代理店、新聞社などと連携を図り取り組む必要があると感じた。 ・表紙を一目見ただけで「行ってみたい」と思えるレイアウトであり、購読意識を誘う。発行した翌年にはフレイルは抑制されたようであり一定の効果はあったようだ。予算的には 900 万円である。都会に隣接する松戸市の取組であるが、鳥取市が取り組むとした場合、費用対効果はいかがなものか考えてしまう。ただし、魅力のある事例と感じた。 ・グリーンスローモビリティについては、各戸から公共交通機関への短い移動手段として、高齢者の社会参加にも効果があると感じる。また、費用も経済的で鳥取市としても検討の必要を感じた。 ・グリーンスローモビリティ地域推進事業の説明では、現物を見たときの議員の反応がとても良かった。 ・グリーンスローモビリティについて、鳥取市においては「くる梨」が現在のところ難なく運行されている。大きさもニーズに適合していると考えるが、乗降客数の減少や、運転手等の人で不足が生じた場合には「グリスロ」のような自動車の活用も必要となると感じた。 ・まつど認知症予防プロジェクト、るるぶ特別編集「いきいき松戸市」の発行、さらにグリーンスローモビリティー地域推進事業について、すべての政策は、高齢者の方が、いつまでも健康で、人との関わりを持ち、外出を支援する。さらに、自身の健康について、早期発見のための行政支援と、発見した場合の医療機関と

	の連携体制を構築しており、高齢者の方が安心して生活できる環境をの取り組みを一気通貫して実施している。
東京都 港区	○子育てひろば「あい・ぽーと」の取組について ・施設の外には、園庭・遊具の他に家庭菜園もされていた。室内にカフェが設置してあり、そこでの料理の食材に使用され、健康に配慮されたメニューが提供できる仕組みとなっており、とても良い取組と感じた。 ・施設のスタッフは、地域の方が支援員、相談員、コンシェルジュ、調理員等として活躍されていた。このように地域の方が、自分ごととして子育ての活動に参画していた。この背景には、地元愛はもとより、しっかりした人材育成プログラムがあるからと思う。 ・一時預かりをして、保護者の買い物、サークル参加、カルチャースクール等の活動しやすさを支援している。日曜・祝日も開館しているのも非常に良い。港区の子ども人口増加施策の懸命な思いが感じられた。 ・この施設の特徴的なところは、年中預かっていただける（夜間は除く）という点である。鳥取市でも取り組んで欲しいが運営に多額の費用がかかることと民間託児所などとの調製が必要であると感じた。港区においては、自己財源の豊富さに加え東京都からの助成もあるとのことであった。 ・この施設の取組は国の子育てのモデルとなっており、誰でも通園制度のモデルにもなっている。 ・民間・公立で補えない事業を行ってきた。財政的支援についてわからなかったが、先駆的な役割を果たしてこられたのだと思う。 ・世話をされるスタッフの中には、「おじいさん、おばあさん」世代の方が多く、多くの経験を持たれた年配の方のスタッフの存在は親世代、子どもたち両社にとって心強いようだ。本市においても「おじいさん、おばあさん」世代の支援をお借りし運営することも大切と感じた。 ・スタッフの方が笑顔で我々を迎えてくださったことを尋ねると、小日向理事長の理念に感銘して集った仲間で働けることに喜びと誇りを持っているとのことだった。共通の理念を持つ人たちが養成講座で学び培った技術を生かして子育て支援に取組む姿に感銘した。